【12】『陸奥津軽深浦沿革誌』

刊1冊（47―8）

〔書名よみ〕むつつがるふかうらえんかくし　〔著編者〕海浦義観
〔写刊年次〕明治三一年（一八九八）

〔外題〕陸奥津軽深浦沿革誌
〔内題〕陸奥津軽深浦沿革誌
〔その他題〕〈尾〉陸奥津軽深浦沿革誌

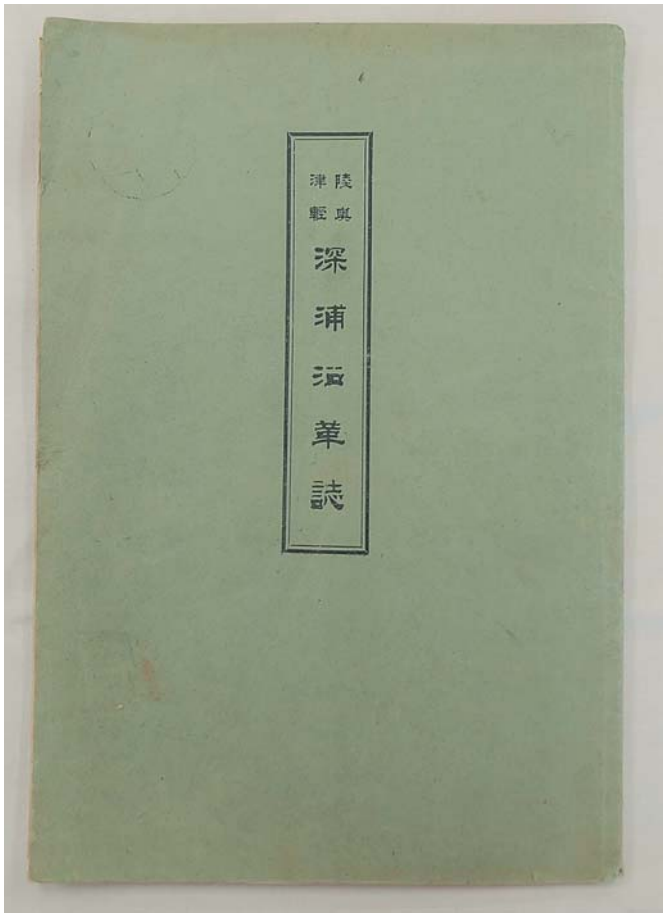
〔残欠状況〕全　〔保存状況〕良好　〔装訂〕袋綴　〔紙数〕二六丁
〔本文用字〕漢字・平仮名　〔一面行数〕一〇行　〔界線〕ナシ
〔匡郭〕縦一五・一糎×横九・六糎　〔表紙〕青丹・無地　〔法量〕縦一八・八糎×横一二・七糎　〔料紙〕洋紙　〔書入〕注記（朱）
〔表紙書入〕ナシ　〔印記〕ナシ　〔備考〕別紙一枚あり（正誤表）。

〔奥書〕
明治三十一年十二月十五日　印刷
明治三十一年十二月廿五日　発行　（非売品）
著述兼発行人　陸奥国西津軽郡深浦村大字深浦四百十五番戸
青森県平民
海浦義観
印刷人　東京市麹町区内幸町一丁目五番地
多田三彌
発行所　陸奥国西津軽郡深浦村大字深浦
深浦保勝会

〔解題〕
本書には巻末に正誤表が貼付されている。これは明治期の単行本にはしばしば見られることで、そうした様式に則った対応であると言える。発行元は深浦保勝会となっており、メンバーは広田雄太郎、広田牧人、島川一覚、七戸藤之助、七戸稜七郎、大屋重兵衛、黒瀧惣太郎、七戸岩次郎、海浦義観となっている。このうち広田牧人は当時の深浦村長であり、この会や本書の成立にも村長として深く関わったことは、増補版（47―4）における義観のあとがきから窺うことができる。

〔参考〕
・『深浦町史』（深浦町役場、一九八五年三月）

（尾崎　名津子）



ざるの新事實を得るもの多くして。此學に特種の光彩を與ふること必大ならん。故に余は各郡各郷に。此書の如きものゝ編成せられん事を切望す。海浦君は佛典に精しく詩文にも亦疎ならず。其人となり澹雅飾らず。恬篤人を愛す。將に佛典に對して大著述をなさんとす。此書其緒餘なりと雖。亦地方美觀の幽光を發揚するに於て十分餘あり。故に余は深く君の擧を賛し。速に世間に頒布せられん事を希望すといふ

明治三十一年五月下旬　東京牛込の僑居に於て

外崎拙居誌

陸奥津輕

深浦沿革誌

海浦義觀著述

我青森縣陸奥國西津輕郡深浦の地は。上古都加留蝦夷の地なり。初は安東浦と云ひ。次に海浦と稱し。後に深浦と呼へり。會津四家合考に曰。上世神武天皇の時。安日長髓彦といふ者あり。兄弟二人勇悍にして智略あり。常に弓箭を佩して諸州を横行す。乃大和膽駒山に抵り。神美眞手命を奉して主とす。以て中州を領すること茲に年あり。神武天皇日向より東征するに及ひ。長髓彦之に抗

明治三十一年十二月十五日印刷
明治三十一年十二月廿五日發行

非賣品

著述兼發行人　陸奥國西津輕郡深浦村大字深浦四百十五番戸　青森縣平民　海浦義觀

印刷人　東京市麹町區内幸町一丁目五番地　多田三彌

發行所　青森縣陸奥國西津輕郡深浦村大字深浦　深浦保勝會

深浦保勝會創立員

廣田雄太郎
廣田牧人
島川一覺
七戸藤之助
七戸稜七郎
大屋重兵衛
黒瀧惣太郎
七戸岩次郎
海浦義觀